

「余命半年」

家族が宣告されたらどうしますか？



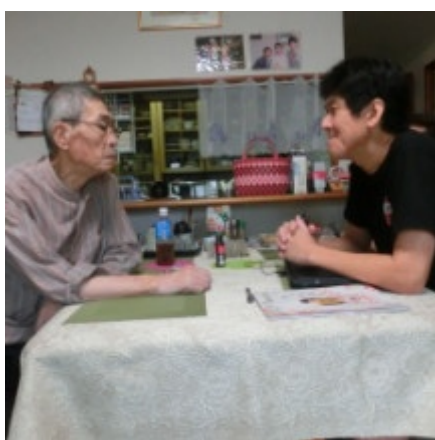
父親、77歳。末期肝硬変。心疾患。大腸がん開腹手術歴有。
毎年恒例のように腸閉塞で入院していましたが、「今年は大丈夫かも？」
そう思っていた矢先、8月に4度目の入院。
その際、主治医から「お父様の現状は、体が軽自動車、それが時速10kmで
走っている状態で、いつ止まってもおかしくありません。覚悟してください」

なんとか危機を乗り越えて、無事に9月下旬退院できたものの、主治医は
「来年の夏を迎えるのは厳しいと思います」
“余命半年”の宣告。息子の私だけに告げられたのでした。

父親本人にその事実を伝えるべきか？ 隠すべきか？
息子として迷いました。

「せっかく退院できたのに、気落ちさせてしまわないか？」
「何も知らせずに見守ることも、優しさではないか？」

しかし、
隠し続けて、伝えればよかった・・・と後悔するよりも、事実を伝えた結果、
父親を消沈させても、そこから寄り添えばいいじゃないか！
何よりも大切なことは、まずは自分が“逃げないこと”だ！
そう決心して、告知したのがこの写真



「今回、退院できたのは奇跡的なことで
もうオヤジの肝臓は限界だと主治医から
言われたんだよ。そして、来年の夏はとても
迎えられないだろうと。
つまり、余命半年と宣告されたんだ。
それを隠しておくこともできたけど、オレは
事実を伝えるべきだと思った。
だって、オヤジの命はオヤジのものだから。
自分の総決算は、自分でしなきゃね」

命の期限を付けられたことを、本人に言えない人の気持ちはわかります。
でも、それはひょっとしたら
落胆し悲しんでいる家族の姿を、自分が見たくないから。
なんてひどいことを言うんだと、非難されたくないから。
自分が嫌な目に遭いたくないからという、エゴから来ているのかも？

「大丈夫！ きっと自分の死を受け入れて、最期まで充実した日々を送れる！」
そう思えないから、そう信じてあげられないから、逃げてしまうのかも？

私は漢方を生業として、これまで病院から見放された人たちを微力ながらも
救って来ました。

余命半年は西洋医学の見立てで、東洋医学の見立てではない。
これまで父は、自分の健康増進に頑張った、最大限に努力したとは思えない。
だから、ここからが本番。

「結果がどうあれ、最期のその日まで、励まし、父のために最善を尽くそう！」
そう覚悟できたから、伝えられたのです。

告知された父に「で、どうしたい？」尋ねたら
「もう、観念します・・・」ではなく、「あと2年、80まで生きて、孫の就職と結婚を見届けたい」と言うじゃありませんか！

「そう、それなら今までと同じ生活してたらダメだよ。余命半年を覆したいなら、覆すだけの目に見える努力をしなきゃね！」

父親にはこれまで何度も、

「テレビ大好き在宅生活が運動不足と腹部血流停滞を招いて、腸閉塞を度々起こすんだよ。おまけに冷たい飲み物やアイスクリームが大好きだろ。

もう、自ら志願して病気になっているようなものだよ。

とにかく体を動かす。そして体を温める。冷たい飲み物は口にしないこと」
伝えてきましたが、なかなか変わらない人で・・・

「のどが乾いた馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」という故事があります。

つまり、問題はアドバイスの内容よりも、本人がそれを“飲み込む”かどうか？
しっかり自分の中に取り入れなければ、良い結果は得られません。

「自分を救うのは、最後は自分」ということです。

皮肉にも余命告知をした時が、父親が「自分から水を飲もう」とした瞬間でした。

夏休みの宿題を早めにコツコツと7月からやればいいものを、8月30日から目覚めてやり出すようなものです（笑）

あと2年、生きたいというなら、その宿題、手伝ってあげましょう！

ということで、

息子は漢方薬剤師だけではなく、父の“専属トレーナー”となったのでした。



入院中、主治医から「厳しい状態です、覚悟してください」と言われて葬儀の準備にも出かけました。

「会場はここで、霊柩車はこれで、骨壺はこれで、お花はこれで」とか・・・しかし、一方ではあきらめずに回復させることにも、知恵を絞っていました。漢方は入院中も飲ませていましたが、あと何かが足りない・・・

その時にひらめいたのが、やはり「**体を動かす**」「**体を温める**」ことでした。そこで、病室で専属トレーナーとなり、同時に足湯器を購入して運び入れました。



注：「老人虐待」ではありません（笑）

結果、見事退院できたのです！

「医者にそう言われたから、そうなんだ、仕方がない・・・」となるか、「いや、何かほかに方法があるはず！」と最後まであきらめず頑張るか。

退院後も、お客様であるテルミー（温熱刺激療法）の先生に、妻がそのかけ方を習って定期的にかけてあげています。



父に限らず、私もやがて死にます。人は生まれた以上、必ず死ぬのです。始まりがあれば、必ず終わりがある。

父の望みどおりに、あと2年、生きたとしても、余命半年の見立てどおり幕を下ろしたとしても・・・

大切なことは、「結果」ではなく

家族が家族の死に向けて、何を感じ、何を考え、何をしたのか？

死別をきちんと受け入れて、家族が本音で語り合い、触れ合えたのか？

死別の後に残るものは、何歳まで生きたか？ではなく、故人に対してどれだけ愛情を持って接したか、その懐かしい「思い出」こそがすべてです。